かくて円環は閉じる
――谷口幸男の翻訳活動と戦後日本の北欧中世研究

小澤　実

ゲルマニストの谷口幸男（1929-2021）は、北欧中世研究にとって今後誰も凌駕し得ないであろう分量の業績を残した。本稿では、彼の残した多岐にわたる業績のうち、中世アイスランド語と中世ラテン語からの原典翻訳に焦点を絞り、戦後日本におけるその歴史的意義を定位することを目的とする。

一　北欧中世への関心

一九二九年七月九日、谷口は東京に生まれた[1]。東京大学文学部ドイツ文学科を卒業した後、一九五三年より秋田大学に助手として二年、さらに五五年より神戸大学文学部に八年半勤め、六三年十月より広島大学に助教授のちに教授として奉職し、八九年三月の定年まで四半世紀と半年を過ごした。その後、学部が立ち上がったばかりの大阪学院大学国際学部に職を得て、二〇〇三年三月まで勤めた。退職後は兵庫県三田市に居を構え、二〇二一年四月三日に市内の病院で亡くなった[2]。ゲルマン語学を専門とし、当初は中高ドイツ語やゴート語の研究を進めていたが、神戸大学在職中の一九五八年から五九年にかけてドイツ学術振興会の奨学金を得てミュンヘン大学留学中にアイスランド語文献について知り、広島大学在職中の一九六七年から六八年のキール大学北欧学研究所留学中にハンス・クーン教授により古アイスランド語文献解読の手解きを受けた。その後一九八一年にはゲッティンゲン大学のルーン学研究室にも短期留学した。一九六三年にドイツ語学文学振興会賞、七三年に日本翻訳文化賞受賞、八〇年に藤村記念歴程賞受賞並びに日本翻訳出版文化賞を受賞、九〇年にアイスランド政府鷹勲章、そして死後、内閣により従四位に叙せられた[3]。

谷口の当初の関心はゲルマン語学にあった[4]。一九六三年に谷口は「ゴート語における格の用法」（神戸大学文学会『研究』二六）によって、ドイツ文学振興会（現公益財団法人ドイツ語学文学振興会賞）により第三回ドイツ語学文学振興会賞を受賞している。研究の初期段階は純粋にゲルマン諸語の語法に関する論考を刊行している[5]。その後、谷口の関心は、語学に基礎を置きつつも、原典翻訳を伴うゲルマン民俗文化から北欧文化全体に広がった[6]。

谷口が初めてアイスランド語からの翻訳を試みたのは、「ヨームスヴィーキングのサガ」である。このサガは、ヨムスボルグと呼ばれる伝説的要塞につどい、そこを拠点にヴァイキング活動を行う集団を描いた短いテキストである[7]。その冒頭に、ゲルマン語学を専門としていた谷口がアイスランドサガの存在を認識する瞬間が描かれている。

「五年ほど前のことである。スウェーデンのルンド大学の助手をしている人とミュンヘンで親しくなった。同じゲルマニストとして、話は自然専門のことになったが、私は彼の博識に、ただ驚くというよりは脅

威を感じたものである。ある時、私が、「ニーベルンゲンの歌」を大いに褒め、これに比べたら、他のものは取るに足らぬ、というようなことを云った。すると彼のいわく、「サガを読みなさい。古代アイスランドのサガには数等面白いものがありますよ。」と。この言葉は、当時、ゲルマン気質をこれほどに活写したものは他にあるまいと思っていた私には、ショックだった。「本当に、そんなに面白い？」と云った切り、私は口をつぐんでしまった。…思えばこの時の彼の言葉が私に火をつけたのだ。あれから五年。相変わらず難解なアイスランド語だが、サガをよむほどに興味がつきない。」（「ヨムスボルク・ヴァイキングのサガ1」二頁）

「ルンド大学の助手」が誰であるのか特定できないが[8]、一九五八年から五九年のミュンヘン大学留学中に、谷口はアイスランド語熱に「火をつけ」られたのである。最初に手をつけた翻訳がなぜ「ヨームスヴィーキングのサガ」であったのかは定かではないが、当時日本で入手できる数少ない原典が、この翻訳の底本（N. F. Blake (ed.), *The Saga of the Jomsvikings* (Nelson's Icelandic Texts). London, 1962）であったのかもしれない。

時をおかずに谷口は、赤毛のエイリークルのサガ」（『形成』二五、一九六五）ならびに「グリーンランド人のサガ」（『形成』二六、一九六六）という二つのサガも訳出している。これらは、ヴァイキングがアメリカに到達したことを記述する「ヴィンランド・サガ」と呼ばれる物語である。この二作品の翻訳を踏まえ、「アイスランドサガにあらわれたヴァイキングのアメリカ大陸発見」（『広島大学文学部紀要』二六、一九六六）という研究文献を刊行した。実のところ、「ヴィンランド・サガ」は、専門家の間では長らくフィクションではないかと疑われていた。しかしその疑いを払拭する二つの出来事が起こった。一つは一九六〇年にノルウェーの考古学者イングスタ夫妻が、カナダのニューファンドランド島のランス・オ・メドウズで紀元千年頃のヴァイキングの入植キャンプを発見したというセンセーショナルなニュースである。もう一つは一九五七年にイェール大学附属バイネッケ図書館で「発見」された、コロンブス以前にアメリカにヨーロッパ人が到達していたことを示す「ヴィンランド地図」である（ただしこれが偽物であることは既に学界の定説となっている）[9]。こうしたアメリカにおける「発見」により「ヴィンランド・サガ」を歴史資料として見直す学界の動きが、谷口が本論考を執筆する背景にあったことは指摘しておきたい[10]。

谷口の中世アイスランド熱をさらに後押ししたのは、一九六七年から六八年にかけてのドイツにおける北欧研究の中心地キール大学北欧研究所への留学である。受け入れ教員のハンス・クーン（Hans Kuhn, 1899-1988）は、ドイツにおける中世アイスランド研究の泰斗であった。とりわけエッダ詩の標準校訂版を補訂したことで知られていた（Gustav Neckel (hrsg.), *Edda: die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern*. 4. umgearbeitete Aufl. von Hans Kuhn, Berlin, 1962）。クーンは谷口が留学した時は既に定年を迎えていたが後任が見つかっておらず、谷口に対し熱心にエッダやサガの読み方を講じた。この留学で谷口は、北欧中世文献全体に対する見通しや文献学的なアプローチを習得するのみならず、現代北欧文学に関する関心や旅行を通じてのヴァイキング自体への関心を深めている[11]。キール大学留学が谷口の北欧学にとって決定的な意味を持ったことは注目すべきである。

二　四つの枢要作品

キール留学を経たのち谷口は、北欧中世研究にとっての基礎となる四冊の成果を立て続けに刊行した。それぞれを位置付けておきたい。

（一）ルーン文字研究

第一に『ルーネ文字研究序説（広島大学文学部紀要　特輯号一）』（広島大学、一九七一）である。これは、勤務先の広島大学文学部紀要の特集号という体裁を取っているが、一三〇頁を超える大論文である。もちろん日本のゲルマン語学の中でルーン文字についてはある程度は知られており、谷口自身も本論考に先立ってルーン文字の呪術的機能に関する論文を発表していた。[12] しかしルーン文字の全体像を日本語で体系的に描き出したのは、本稿が初めてであった。今でこそいくつかの翻訳でルーン文字の梗概を知ることができるが、それでもなお、この谷口の序説を超えるルーン文字の研究は存在しない。[13]

谷口のルーンに対する関心は、キール大学留学中に深まった。その時の経験は以下のように記述されている。

「大学の講義題目に非常勤講師によるルーン学入門が出ていた、助手のヤンセン氏に相談すると、あんな退屈な講義には出ない方がまし、それより H. Arntz: Handbuch der Runenkunde を読んだら、と言われ、Arntz を初め研究室の本を読んだ。研究室にある大部のルーン碑文集には圧倒された。キールの北に有名なヴァイキングの遺跡ハイタブがある。よく訪れたものだが、ついでにゴットルプ城の博物館にあったドイツで唯一（本来はデンマーク）のルーン石碑四つに対面し、どこまで読めるか毎回試すのが楽しみだった。フレンスブルクからデンマーク領に入り、ヴァイキングの遺跡探訪をしてまわったときも、イェリングの素晴らしいルーン石碑をはじめ、オールフスやコペンハーゲンの博物館でかずかずの逸品と出会うことができた。その後、アイスランド、スウェーデン、ノルウェーへもルーン探訪に出かけた。」（「ドイツのルーン碑文」一頁）

こうした読書経験並びにルーン現物との出会いが谷口の雄編執筆の根底にはある。参考文献を確認する限りにおいては、各国の碑文刊本に加えて、ドイツ語（H. Arntz; W. Krause; K. Düwel）と英語の基本的な概論は参照しており、スウェーデン語（O. von Friesen）やフランス語（L. Musset）の著作も参考にしている。[14] 広島大学の図書館にはルーン文字に関する著作もあったと述懐しているが、[15] 参考文献のほとんどは、その後谷口自身が入手したものだろう。そういった点においては、日本のルーン文字研究にとって画期となる研究である。その後も谷口はルーン文字への関心を深め、既に述べたように一九八一年にはドイツ語圏のルーン研究の中心地ゲッティンゲン大学のルーン学研究室に短期留学を果たした。[16]

（二）エッダ

第二に『エッダ　古代北欧歌謡集』（新潮社、一九七三）である。それまでエッダ詩について部分訳は存在した。[17] 北欧神話という人気コンテンツの源泉として、エッダに対する関心は必ずしも低いわけではなかったかもしれない。コラムやグレンベックの北欧神話概説も版を重ねていた。[18] 谷口は、当時最も信用できるネッケル版に基づいて、古アイスランド語から直接翻訳した。実はこの時谷口が刊行したのは「エッダ」全体ではない。古北欧の神話世界を伝えるエッダには「韻文エッダ（エッダ詩）」と「散文エッダ」がある。[19] アイスランド人のスノッリ・ストゥルルソンがノルウェーを行脚して収集したとされる「散文エッダ」は、「序文」「ギュルヴィたぶらかし」「詩語法」「韻律論」からなる。『エッダ』には「詩エッダ」に加えて、「散文エッダ」のうち「ギュルヴィたぶらかし」のみが収められていた。[20] 谷口はさらに、一九八三年に「詩語法」を、二〇〇二年に「序文」と「韻律一覧」の訳を完成させ、韻文エッダ並びに散文エッダ双方の完訳を果たしている。[21]

谷口は自分の訳業について何かを述べることは少ないが、『エッダ』の翻訳については十年後に次のように述懐している。

「『エッダ』の場合、韻律はスカルド詩ほど複雑ではない。しかし内容が神話と英雄伝説であるだけに、解釈に手こずる。いちごの背後に何が隠されているのか、時に一週間以上も考えあぐんでどうにもならない。まことに「茫洋として寄るべきかたなく」（蘭学事始）という状態であった。この結果、「巫女の予言」のように訳文よりも訳註の方が長いという不体裁な翻訳になってしまったわけである。このようなていたらくであるから、顧みて他をいう資格などないのである。」（「叙事詩の翻訳」『月刊言語』一三－六、一九八四、六六頁）

日本では全く専門家を欠く中世アイスランド文学作品を新潮社という著名出版社から刊行することができたのは、日本における北欧文学の草分けとして名声の確立していた山室静（1906-2000）の存在が大きかったであろうことは想像にかたくない。[22] それを裏書きするのは「最後に西独キール大学北欧研究所で親しく『エッダ』、「サガ」のご指導を頂いたハンス・クーン教授と、この訳書の刊行にあたって種々ご高配を賜った山室静先生に深甚なる感謝の意を表します」（『エッダ』三〇四頁）との記述である。本書刊行後、新潮社のPR誌『波』には山室自身が紹介の筆をとっている。[23] 山室自身は北欧語から直接翻訳をしていたわけではなく、もっぱら英語やドイツ語訳に依拠していたため、新世代の北欧学者である谷口に次を託した、というようにも読める。[24] 他方で、刊行を大いに喜びつつも、「注文をつけるとなるといろいろ言うべきことはあるだろうが」（二〇頁）とあるように谷口訳の『エッダ』には不満なしともせず、という点が、山室の先達としての気概の表れと見ることもできるかもしれない。

『エッダ』は、呉茂一訳『花冠　呉茂一訳詩集』（紀伊国屋書店、一九七三）並びにジェームス・クリュス（植田敏郎訳）『クリュス選集』（全五巻、講談社、一九七三）とともに、日本翻訳家協会による第一〇回日本翻訳文学賞を受賞した。選評の言葉を確認することはできないが、全編古アイスランド語から翻訳された日本初の作品でもあり、なおかつ、ゲルマン世界の精神を伝える最高の作品であることを考えると、本書が読書界に与えたであろうインパクトも小さくはないように思われる。その現れの一つとして、岩波書店の『思想』六〇〇号に、明らかにこの訳業に基づく山室と谷口の論考が掲載されたことは留意しても良いかもしれない。[25]

（三）中世アイスランド文学の解説

谷口は、『エッダ』刊行後、『エッダとサガ　北欧古典への招待』（新潮社、一九七六）という中世アイスランド文学の概観を新潮選書の一冊として刊行した。[26] 中世アイスランドに関してはすでに山室の小著もあったが、本書は、エッダとサガと言う二大中世アイスランド文献に関する詳細な紹介である。網羅性と手頃さという点で本書に勝る入門書はいまだになく、それゆえに、二〇一七年には四十年ぶりに復刊された。「ゲルマン神話の根本資料としてのエッダ、初期中世ヨーロッパ文学の一角を飾る散文芸術の宝庫であるサガ文学、この二つの世界に拙い筆ながら読者を導入し、いくらかでもその面白さに触れていただけたら」（一〇－一一頁）と願いつつ谷口は、現地の研究に依拠しながら、日本ではまだ翻訳がほとんどなかったサガの梗概を紹介した。[27]

本書の冒頭で谷口は、日本におけるサガ受容史にも触れている。具体的には、『ストゥルルンガサガ』と『ニャールのサガ』を紹介した小泉八雲（1850-1904）が東京帝国大学で行った講義と、『ヘイムスクリングラ』

を英訳で読む科学者の寺田寅彦（1878-1935）によるエッセイを引き合いに出しながら、明治時代の日本でも、サガ文学に触れていた日本人のいたことを振り返る。その上で本書刊行時の現状を以下のように述べている。

「ハーンや寺田寅彦のサガについての先駆的紹介から早や半世紀余も時は流れている。北欧では早くからエッダやサガの刊行や翻訳に見るべき成果が多いが、わが国では最近エッダの翻訳と、単行本としては初めてのサガの訳が刊行されたほかは、少数の研究者を除いて古代北欧文学の世界は未だ空かずの秘密の部屋である。」（『エッダとサガ』八頁）

「エッダの翻訳」はもちろん谷口自身が新潮社から刊行した一九七三年の翻訳を指している。他方で「単行本としては初めてのサガの訳」とは、山室静『赤毛のエリク記　古代北欧サガ集』（冬樹社、一九七四）である。[28] しかし、その後書きに明らかなように、山室の訳業は英語からの重訳である。他方で、本書と前後して、谷口以外にも、早野勝巳らの訳業も始まった。ゲルマン語学に関心のある研究者がサガに徐々に引き寄せられていった。[29] さらにこうした動きと連動して、歴史学界でも熊野聰によるアイスランド研究が始まっていた。[30] こうした研究者らが、一九八一年に、「アイスランドの社会と文化の研究、およびこれの日本における向上を目的とする」（会則第二条）ために、谷口を初代会長として「日本アイスランド研究会」（一九八六年より「日本アイスランド学会」に改称）を立ち上げることになるだろう。[31]

（四）アイスランド人のサガ

いくつかの小さなサガの翻訳を経て、[32] 満を持して谷口が刊行したのが九〇〇ページに近い大冊『アイスランド・サガ』である。『エッダとサガ』で谷口自身が説明したように、中世アイスランドで筆者されたサガにはいくつもの類型が存在する。本書では、そうした類型のうち「アイスランド人のサガ」（別名家族のサガ）と呼ばれる、ヴァイキング時代のアイスランド社会を舞台に描き出されたサガの中から、最も完成度が高く人気があるとされる五本の作品（「エギルのサガ」「グレティルのサガ」「ラックサー谷の人びとのサガ」「エイルの人びとのサガ」「ニャールのサガ」）並びに「古代のサガ」の代表作である「ヴォルスンガサガ」を訳出している。いずれもアイスランドで刊行されていた標準校訂（Islenzk fornrit）に基づく訳文である。この訳業について谷口の言葉を引いておこう。

「『エッダ』やサガを訳した乏しい経験からいうと、翻訳のむつかしさは第一に、原典の理解にどこまで迫れるか、ということで、第二には、原文のもつ意味と味わい、原音の美しい響きと流れを日本語にどう移しかえるかであろう。私の場合、複雑な韻律と押韻を持ち、むやみにケニング（代称）をつみ重ね、語順の出鱈目なスカルド詩の翻訳では、右のような日本語への移しかえは全く不可能だった。韻律にも押韻にも眼をつぶり、歯ぎしりしながら語順をととのえ、ケニングの意味はカッコの中で示しながら、大意をとるのがせいぜいのところであった。時々あまりの難物に腹が立ち、当時の聴衆にもこれが完全に理解できたのかと開き直ったこともある。」（「叙事詩の翻訳」『月刊言語』一三－六、一九八四、六五－六六頁）

一九五八年のミュンヘンへの留学でサガの存在を知って『アイスランド・サガ』の刊行に至るまで二十年の古アイスランド語の研鑽を積んでいた谷口にしても、サガにしばしば挟み込まれるスカルド詩の翻訳には相当

手こずっていたことがここから読み取ることができる。もっとも谷口は、スカルド詩やその受容環境について重要な論考をいくつか刊行しており、手こずりながらも、余すところなく訳し上げている点は留意すべきである。[33]

本書の刊行に先立って、既に、アイスランド語からのサガ翻訳が紀要などに掲載されるようになっていたことは既に述べた、他方で、近代語訳からの重訳である山室静『赤毛のエリク記』（冬樹社、一九七四）や松谷健二「グレティルのサガ」（一九六六）を経て、植田兼義訳『ニャールのサガ』（朝日出版社、一九七八）や菅原邦城訳『ヴォルスンガサガ』（東海大学出版会、一九七九）といった本格的な原典翻訳も書棚に並んでいた。本書の刊行直前に新潮社のＰＲ誌『波』に『アイスランド・サガ』の全体を紹介する記事を寄せた菅原邦城（1942-2019）は、「今回の谷口氏の訳はこれらすべてを凌駕する大冊である。その刊行を決断した出版社の見識に敬意を表すと同時に、有能な訳者の二〇年になんなんとする勤勉なご研鑽に改めて敬服するものである」（「中世北欧の散文学〈サガ〉」『波』一三―九、一九七九、四一頁）と述べた。

『アイスランド・サガ』は、翌年二つの賞を受賞した。一つは日本翻訳家協会による第一六回日本翻訳出版文化賞である。『エッダ』が受賞した日本翻訳文化賞が個別の作品に対して授与される性質であるのに対し、こちらは出版社の画期的翻訳事業に対して授与される。[34] 一九八〇年には島崎島村にちなんだ第十八回藤村記念歴程賞も受賞している。受賞理由は「『アイスランド・サガ』（新潮社）その他北欧古代中古文学の訳業」であり、「正賞及び副賞それぞれ十万円並びに記念品」を授与されている。[35] 同年一〇月六日（月）の「歴程創立四五周年記念「歴程フェスティヴァル　未来をまつれ』」新宿旭記念ホール、午後6時開演）」で執り行われた授賞式では、山室が「谷口幸男について」という題目で紹介役を務めている。[36] 加えて、谷口と山室は、同年の『ユリイカ特集北欧神話』でも対談をしている。[37]

その後一九八〇年代の谷口は、刊行された作品のみを見ると、一旦アイスランド語古典作品の翻訳からは距離をおき、アイスランド研究会の会長を六年にわたって務めながら、現代北欧文学の翻訳やグリム研究という現代的課題に取り組んだ。広島大学を定年で退職し大阪学院大学で新しい生活を始めて間もない一九九〇年八月二二日、谷口は、「アイスランド文学への学問的貢献ならびにその結果としてアイスランドと日本との間の関係を高めたこと」（a contribution to Icelandic Literature and thus enhancing Icelandic-Japanese relations）を理由として、「アイスランド政府鷹勲章」（The Order of the Falcon）を、当時の大統領ヴィグディス・フィンボガドッティルより授与された。[38] 谷口はアイスランドに招聘されて滞在し、アイスランド大学で「日本におけるアイスランド文学の受容」（Rezeption der isländischen Literatur in Japan）というドイツ語講演を行った。[39] この時が三回目となるアイスランド滞在時の様子は、当該国を代表する日刊紙『モルグン・ブラージズ』（一九九〇年八月二二日）の「エギル・スカッラグリームソンは日本のサムライと大変よく似ている」と題したインタビューとともに、[40] 帰国後執筆したいくつかのエッセイの中で知ることができる。[41]

三　古アイスランド語からラテン語へ

前節で述べたように、『アイスランドサガ』を最後として、谷口の古アイスランド語原典翻訳活動は一旦止まっている。他方で、北欧古世界の精神を知るためには、古アイスランド語のみでは不十分であり、ラテン語作品にも目を向ける必要がある。とりわけブレーメンのアダム『ハンブルク司教事績録』（*Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*, c. 1070）、

サクソ・グラマティクス『デーン人の事績』（*Gesta Danorum*, c. 1200）、オラウス・マグヌス『北方民族の歴史』（*Historia de gentibus septentrionalibus*, 1555）は、全ての北欧学者にとって検討が不可欠の記述作品である。

谷口は、広島大学時代に、ゲルマン諸語に加えて、ラテン語の読書会を開いていたことを回想している。[42] もちろん学生時代に古典語の文法は習得していたのであろうが、以下の論文においてラテン語作品を対象として分析を試みた。ブレーメンのアダムについては「ブレーメンのアーダム著『ハンブルク教会大司教史』第四の書について」（『ドイツ文学論集：水野忠敏教授・滝沢寿一教授退官記念』、一九七六）において、サクソ・グラマティクスについては「サクソ「ゲスタ・ダノールム」にあらわれた異教時代の習俗」（『昭和五八年度科学研究費補助金（一般研究（B）57450042）研究成果報告書』一九八四）において、オラウス・マグヌスについては「オラウス・マグヌス『北方民族誌』について」（『広島大学文学部紀要』四四、一九八四）である。個々のラテン語作品について、これら以外の専論は刊行しておらず、この時期に谷口が関心を持っていたキリスト教とは異なるゲルマン人の習俗に関する重要資料としての可能性をそれぞれ追求した内容であると言って良い。

その結果として、一九九一－九二年に上下二冊で刊行したのがオラウス・マグヌス『北方民族文化誌』（渓水社）である。すでに広島大学時代の谷口の論文集『ゲルマンの民俗』の版元となっていた広島の地方出版社渓水社が版元となった。本書は、プロテスタント国家となったスウェーデンからローマに亡命した聖職者オラウス・マグヌスが、現地において、北欧の民俗風習をヨーロッパ世界に知らしめるために執筆した作品である。文章それ自体も貴重な民俗誌であることながら、谷口の関心を引いたのは、本文に添えられていた四八一枚の図版である。[43] 翻訳の経緯について確認しておきたい。

「一九七二年に『中世北欧文化史事典』二二巻の編者で有名な、スウェーデンの学者グランルンドによるリプリント版がコペンハーゲンで刊行されたので、訳者もすぐに購入した。そのあまりの面白さに、折にふれ学生や同僚のあいだで話題にしてきたものの、とても翻訳までは思いつかなかった。ところが、たまたまストックホルムで本屋歩きをしていたとき、同じグランルンドの四巻本のスウェーデン語訳をみつけ、その的確な訳と詳細な注、著者オラウスの伝記を手にして初めて訳出を決意できたわけである。結局七年もの歳月をこの仕事に費やしたことになるが、それは手強いラテン語と、身辺の繁忙のせいでもある。ただ本書の内容の汲めども尽きぬ面白さだけはいつも訳者を励ましてくれた。「博物学の世紀」という言葉の聞こえてくる昨今、読書子の机辺に「こんな本もありますよ」と差し出したい気持ちが現在の心境である。」（『北方民族文化誌（下）』六六四－六六五頁）

訳出に「七年」であるから広島大学退職間際の一九八五年頃から、スウェーデン語訳を参照にしながら訳文を案出していた事になる。

その後、立て続けに刊行したのが、サクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』（東海大学出版会、一九九三）である。本書は、デンマーク王国の名君ヴァルデマー一世の時代にロスキレ司教（のちルンド大司教）をつとめたアブサロンに近侍したサクソによる、中世北欧における最も著名なラテン語作品である。ただし谷口が翻訳したのは、神話時代からヴァイキング時代を描写した第九章までである。[44] 後書きによれば「本書の翻訳にはとびとびながら十二年の歳月を要した。しかも長い間筐底に秘めていた原稿が日の目を見ることになったについては」（『デンマーク人の事績』四四四頁）とあるので、『アイスランド・サガ』を刊行してほどない一九八一年には遅くとも訳出に着手していたことになる。つまり

『北方民族文化誌』よりも早くこちらの方に手をつけていたことになる。「エッダ」とは別の神話世界を記録する『デンマーク人の事績』の重要性を谷口が認識していたためであろう。

四　かくて円環は閉じる：『ヘイムスクリングラ』の完成

兵庫県三田市に居を構えた谷口は、古アイスランド語からの最後の長編翻訳に取り掛かる。『ヘイムスクリングラ　北欧王朝史』（四巻、プレスポート・北欧文化通信社、二〇〇八－一〇）である。一三世紀アイスランドの文筆家にして政治家スノッリ・ストゥルルソンがノルウェー王の歴史を描いた本作品は、古アイスランド語による最大かつ最高の作品と言われており、標準刊本にして三冊という巨大な作品である。[45]「私は定年を半年後に控え、やっと「ヘイムスクリングラ」の邦訳を終えました」と小澤宛の私信にあるため、[46]二〇〇四年の段階ではすでに訳文は完成していたが、「マイナー作品」であり大部であったため出版を引き受ける書肆を探すのに苦労をした。[47]結局、旧知の横山民司（目白大学名誉教授）の個人出版社であるプレスポート・北欧文化通信社を版元とし、全四冊で刊行された。[48]

谷口は、『ヘイムスクリングラ』の冒頭を飾る「ユングリンガサガ」の訳文を既に刊行していた（「ユングリンガサガ（一）（二）」『形成』三九（一九七八）：四〇（一九七八））。ただし、刊行当時は、ノルウェー王権の歴史である『ヘイムスクリングラ』全体に関心があったというよりも、『エッダ』や『デンマーク人の事績』前半部と同様古ゲルマン世界の神話世界を明らかにするための作業であったことが推測できる。既に見たように谷口はその後ラテン語作品の翻訳に移行しており、『ヘイムスクリングラ』については一旦関心が離れていたようにも思われる。しかしその後、同じスノッリの手になる『散文エッダ』を訳す過程で、『ヘイムスクリングラ』の全訳の意欲も湧いてきたのかもしれない。翻訳の第一巻に付された「解説」にある、次の段落に私たちは注目すべきである。

「スノッリは当時流布していた民間伝承にも目配りをおこたらず、そのいくつかを絶妙なエピソードとして作中に織り込んでいることも見逃せない。それはほかには見られないユニークなエピソードであって、ときにユーモアあふれる効果を発揮している。たとえばデンマーク王はラルド・ゴルムスソンがアイスランド偵察に魔法使いを派遣したところ、アイスランドの四地区の別々の守護獣が出現してそれを見事撃退した話、ソーラリン・エイヨールヴスソンの醜い脚の話、あるいは〈オーラヴ聖王〉がアイスランド領有を秘め、エイヤフィヨルドのグリム島の割譲を申し出たときの民会でのエイナルの決然とした応答などがそれである。このように様々の工夫をしながら歴史を生き生きと書くことが彼の狙いであったのだろう。」（『ヘイムスクリングラ（一）』、一九頁）

ここで谷口が取り上げるエピソードは、『ヘイムスクリングラ』を通常の歴史書として利用する場合、真実性を担保することができないとして捨象する箇所である。しかし谷口は、これらの「民間伝承」を記録しているからこそ、『ヘイムスクリングラ』の記述的価値があると判断しているようでもある。

谷口が『ヘイムスクリングラ』を訳し終えるまでに、日本の中でも、歴史書としての『ヘイムスクリングラ』の重要性が高まっていたことは指摘しておく必要がある。ノルウェーとアイスランドの国家形成を検討した熊野の研究はいうまでもなく、ノルウェーの歴史家スヴェーレ・バッゲらの新しい研究動向を受けた阪西紀子（1962-2021）の論考なども、中

世ノルウェーの政治状況を伝える数少ない史料としての『ヘイムスクリングラ』をはじめとする国王サガの価値を日本でも共有させる契機となっていたことも背景としてはあるだろう。[49] 日本アイスランド学会がその創立一〇周年を記念して刊行した『サガ選集』（東海大学出版会、一九九一）には、『ヘイムスクリングラ』の一部をなす「ハーコン善王のサガ」も八亀五三男により訳出されており、「国王サガ」というジャンルに対する関心も高まっていたことも指摘できる。

他方で、『ヘイムスクリングラ』における谷口の解釈や訳文については、これまでの作品もそうであったにように留保なしとはしない。全体を見通すためであればともかく、専門家が細部を検討する場合は、やはり谷口が依拠した刊本に立ち戻って自身の研究に反映させる必要があるだろう。しかしすでに七〇半ばを迎え、その視力と体力という点で残された時間のなかった谷口にとって、彼の原典翻訳活動の掉尾を飾る『ヘイムスクリングラ』（世界の輪の意）の刊行は、何をおいてもまず完遂されるべき彼個人の生の営みであったことを私たちは思い起こす必要がある。『世界の輪』が最後のピースというのは出来過ぎた巡り合わせかもしれないが、かくて谷口の翻訳活動の円環は閉じる。

五　翻訳活動を支える精神

谷口は、生涯をかけた原典翻訳活動を通じて、何を追求しようとしていたのだろうか。そこには、一九五〇年代末に留学先のミュンヘンでサガの存在を知って以来一貫して、「ゲルマン気質」への関心があったことは否定できない。グリム以来のゲルマニストの常として、ラテン文化ともキリスト教文化とも異なるゲルマン文化それ自体を追求しようとする姿勢は、今見ればややナイーブに感じるかもしれないが、独自の民族文化の発露の解明に関心を注いだ戦後アカデミアにおいては最重要課題でもあった。[50] 谷口は『ゴート語訳聖書』や『ニーベルンゲンの歌』などに見られるゲルマン諸語の検討から、より古いゲルマン精神を残していると推測される古アイスランド語文献へとわけ入り、北欧中世文献の中に、ゲルマンの古層を探ろうとした。[51] 一九七六年に書き下ろしの単著で述べた次の言葉は、中世アイスランド文献を読み抜いた谷口ならではの矜持も垣間見られる。

「しかし、私はこのような運命観や英雄主義の面からのみ古代中世ゲルマン人の世界を切って欲しくないと思う。アイスランドに植民した人々の実生活を通してうかがわれるような、多種多様な社会生活や文化に注目していただきたい。そのために、社会、法、経済、信仰、改宗、夢その他異教的な人々のさまざまな営みの反映をサガの記述を通して、なるべく濃厚に出そうと心がけてみたつもりである。図式的観念的にヨーロッパ世界の成立をとらえる前に、ゲルマン人の実生活と信仰、社会と文化に一歩でも踏み込んだ考察の生まれることが私の念願であって、本書がそのための刺激にいささかでもなれば望外の喜びである。」（『エッダとサガ』、二七一－二七二頁）

他方で谷口は、原典翻訳を通じてそうした古層の独自性を追求する論考をしたためつつも、それを通じて、自らの生まれ育った日本の民族・民俗文化との間の比較文化論への関心を培ってきたことも指摘しておきたい。[52]

「歴史と風土を異にして、一見表面上は大きく相違しているような習俗でも、根底では、農民の豊穣儀礼や死者儀礼、村落共同体の安全、平和、豊作への願いといったものに太い線でつながっている。古くからの民衆の日常生活と直結してきた必要、願い、夢、祈りなどが民間俗

信や年中行事の間からくっきりと浮かび上がってくる。国は違い、歴史と伝統を異にしていても、洋の東西の民俗の中に、ある種の根源的な類似性、あるいはエリアーデのいう宇宙的連帯性といったものが認められるように思う。」（「語学教育と民俗学」『ドイツ語教育部会会報』二八、一九八五、三〇頁）

一九八五年という時代を思うに、この谷口の記述は、民俗学や文化人類学に可能性を見出し、文明化されたと思われがちであったヨーロッパや日本の古層を掘り起こそうとする網野善彦（1928-2004）や阿部謹也（1935-2006）らが展開していた社会史や二宮宏之（1932-2006）や樺山紘一（1941-）らが進めていたアナール派の紹介などとの親和性を見てとることもできる。[53] 谷口自身は必ずしもそうした「最新の」文献に依拠して論文を執筆することはなかったが、谷口ゲルマン学の出発点である「ゲルマン気質」を独自に追求した結果として、当時のアカデミアの大きな関心と交錯した。中世北欧研究という一般的にはアカデミアの周縁に位置する谷口自身の歩みも、図らずも戦後日本におけるアカデミアの歩みを映し出すリトマス紙の役割を持ちうるのかもしれない。しかしこうした谷口ゲルマン学の同時代性や「時代精神」を踏まえた検討は別稿に譲らねばならない。

谷口の訳業は古アイスランド語とラテン語からの翻訳を合わせただけで有に三〇〇〇ページを超える。個人による訳業としては破格の分量であるというだけでなく、「エッダ」、「アイスランド人のサガ」、『デンマーク人の事蹟』、『北方民族文化誌』、『ヘイムスクリングラ』という北欧中世史料原典の最も枢要な部分のおおよそを訳出した。欧州を見ても、これだけの訳業を個人でなしとげた研究者は存在しないし、これらの現代語訳を全て擁する言語はおそらく英語だけだろう。たとえその訳文に専門家からすれば瑕疵があるとしても、まずは全体を提示すべし、と言う思いが谷口にあったであろうことを想像することはかたくない。

すでに日本における中世北欧研究は、文学にせよ史学にせよ、海外学会での報告は常態化しているし、現地研究者とのコラボレーションも積極的に行われている。[54] それぞれの研究者が生み出す研究それ自体の水準も、谷口が専論をしたためていた時代に比べれば、格段に上がっているのかもしれない。しかしこれらの成果は、谷口という巨人の肩に乗ったが故に、であることは北欧中世を専門とする誰もが了解しているはずである。今後まずもって誰も凌駕しえないであろう谷口の原典翻訳は、それ自体が戦後日本の北欧学の歩みの体現であるとともに、ヨーロッパ研究の深化の証拠であり、また、ことのほか言語文化を重視するアイスランドと日本との交流史の一翼を担っていたとすら言えるだろう。[55]

注

（1）日本著作権協議会編『著作権台帳：文化人名録』著作権協議会編集局、一九九七、三三九頁。

（2）新聞報道による。

（3）『官報』第四九一号一〇頁（令和三年五月一四日）。

（4）東京大学で谷口の集中講義を受講した清水誠（北海道大学）の記憶によれば、谷口の卒業論文はフランツ・カフカであった（清水誠「解説」谷口『エッダとサガ』新潮社、二〇一七、三〇一頁）。おそらくその卒論を元にしたであろう論考が、谷口「カフカの作品について」『近代』（神戸大学）一四、一九五六、三三－四〇頁。

（5）「Mittelhochdeutsch に於ける否定の用法について」『ドイツ文学』六、一九五六、三六－四〇頁や「ウルフィラのゴート語聖書の成立

（1）（承前）『近代』（神戸大学）三一、一九六一、一－二六頁：三二、一九六一、六九－九六頁など。

（6）多数にのぼる谷口の初期の論考の一部は『ゲルマンの民俗』渓水社、一九八七にまとめられている。

（7）「ヨムスボルク・ヴァイキングのサガ：ヴァイキングの片影（一）（二）」『形成』二三、一九六四、二－一九頁：二四、一九六五、二九－四七頁。

（8）この「ルンド大学の助手」についてはアイスランド政府鷹勲章の授与を伝える「モルグン・ブラージズ」のインタビューでも触れているが（後述）、名前は明らかにされていない。

（9）その後谷口は、ヴィンランド地図が贋作であることを認めている。谷口「贋作ヴィーンランドの地図」『歴史読本』二八－一、一九八三、三八－四〇頁。ヴィンランド地図に関しては、Kirsten A. Seaver, *Maps, Myths, and Men: The Story of the Vinland Map*, Stamford: Stamford UP, 2014を参照。

（10）谷口は、『エッダとサガ』（一五二－一五三頁）において、前者については「昭和四十年十月十三日付の毎日新聞」で、後者については（遅くとも）「昭和四十年十月六日ロイター共同」による「シーボーグ米原子力委員長談」で知ったことを記している。

（11）キール留学時代の思い出は、「ハイタブの話」『北欧』八、一九七四、六四－七三頁：「三人の講師への質問」『波』（新潮社）二一－九、一九八七、三四－三五頁：「ドイツのルーン碑文」『広島ドイツ文学』一〇、一九九六、一－一二頁を参照。これらによれば、谷口は、エリック・モルトケやクラウス・デューウェルのような著名研究者と会うとともに、ヴァイキングやルーンに関する様々な遺跡を巡っている。

（12）谷口「エッダ、サガ、碑文に現れたルーネ文学の効用」『広島大学文学部紀要』二九－二、一九七〇、一六〇－一八四頁。

（13）本書の内容を一般向けに示したのが、「ルーネ文字の話」『北欧』五、一九七四、一三六－一四五頁。小著だが信頼できる内容を提供するのは、レイ・ページ『ルーン文字』菅原邦城訳、学藝書林、一九九六：社会史的な観点から、小澤実「ルーン文字」大城道則編『図説 古代文字入門』河出書房新社、二〇一八、七九－八五頁。

（14）ルーン文字研究の概要は、小澤実「コンテクストの中のルーン Terje Spurkland, *Norwegian Runes and Runic Inscriptions*. Woodbridge: Boydell & Brewer 2005, ix + 206 p.」『北欧史研究』二三、二〇〇六、九一－九九頁。

（15）谷口「広島の回想」『ドイツ文学論集』（日本独文学会中国四国支部）二三、一九九〇、六頁。

（16）そこではクラウス・デューウェル博士の研究室を利用し、ウルリヒ・フンガー博士とやりとりもしている。留学時代の思い出とドイツのルーン学については以下の論考を参照。「ドイツのルーン碑文」一頁。谷口によるその他のルーン研究論考として、「アイスランドのルーン碑文」『大阪学院大学国際学論集』五－一、一九九四、三九－六二頁：「ベルゲン出土のルーン碑文」『大阪学院大学国際学論集』一二－一、二〇〇一、五三－七三頁。

（17）幕末明治における受容は、「『北欧鬼神誌』について」『大阪学院大学国際学論集』四－二、一九九三、一四三－一六二頁。

（18）コラム『オージンの子ら：北欧神話』尾崎義訳、岩波書店、一九五五：グレンベック『北欧神話と伝説』山室静訳、新潮社、一九七一。

（19）テリー・グンネル（伊藤盡訳）「エッダ詩」『ユリイカ特集北欧神話の世界』青土社、二〇〇七、一二一－一三七頁：近年の研究動向に

関して、Carolyne Larrington, Judy Quinn, and Brittany Schorn（eds.）, *A Handbook to Eddic Poetry: Myths and Legends of Early Scandinavia*. Cambridge: Cambridge UP, 2016.

（20）「ギュルヴィたぶらかし」は、別の刊本を用いている。Anne Holtsmark, and Jón Helgason（ed.）, *Edda. Gylfaginning og prosafortellingene av skáldskaparmál*. København: E. Munksgaard, 1950.

（21）『スノリ「エッダ」「詩語法」訳注』『広島大学文学部紀要』特輯号三、一九八三：「スノッリ・ストゥルルソン『エッダ』「序文」と「ハッタタル（韻律一覧）」訳註（一）（二）（三完）」『大阪学院大学国際学論集』一三－一、二〇〇二、二〇三－二三〇頁：一三－二、二〇〇二、一二五－一五四頁：一四－一、二〇〇三、九九－一三〇頁。

（22）山室については、中丸禎子「ヨーロッパ近代の根源と周縁」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための六五章』明石書店、二〇一六、三八〇－三八五頁。

（23）「ゲルマン民族の源泉に遡る――古代北欧歌謡集『エッダ』全訳によせて」『波』八、一九七三、一九－二一頁。

（24）山室静「北欧文学と私」『北欧』八、一九七四、一八七頁。「十年ほど前から、興味の中心が古代中世に移り、「エッダ」、「サガ」の類をよみあさっておそまきに古代アイスランド語の勉強もいくらかしたが、七十歳に近い身ではまったく日暮れて道遠しなので、ついに断念することにした。その断念記念に、これまで訳したためたサガの訳をせめて一冊出すことにしてもはや校正も終わっているのでこの雑誌が出る頃には「赤毛のエリク記」が出ていることと思う。」

（25）山室静「スノリの生涯と作品」『思想』六〇〇、一九七四、八〇－九八頁：谷口幸男「エッダ神話に現れたオーディン像」『思想』同号、九九－一一七頁。

（26）山室静『アイスランド：歴史と文学』紀伊国屋書店、一九六三。

（27）本書においてアイスランドの古典作品として欠かせないスカルド詩については「別に独立した論攷として将来を期したいと思う」（二〇頁）とあるように、あえてエッダとサガに限定している。その成果として、「スカルド詩人とケニング」古田敬一編『レトリックと文体：東西の修辞法を訪ねて』丸善、一九八三、一八三－二〇九頁。

（28）もっとも、エッダとサガの部分訳を納めた単行本として筑摩文学全集の一冊があったことは記しておかねばならない。松谷健二訳「エッダ」「グレティルのサガ」『世界文学大系・中世文学集』筑摩書房、一九六六。

（29）石川光庸・早野勝巳・吉島茂訳・解説「ヴェルスングのサガ－一」『慶応義塾大学商学部日吉論文集』一六、一九七五、一－三七頁：早野勝巳訳「ヴァープンフィヨルドのサガ試訳（上）（下）」『慶応義塾大学商学部日吉論文集』二二、一九七八、二三－五二頁：二四、一九七九、五一－七一頁。

（30）熊野の研究の歩みについては、小澤実「解説：『北の農民ヴァイキング』から『ヴァイキングの歴史』へ」熊野聰（小澤実解説・文献解題）『ヴァイキングの歴史　実力と友情の社会』創元社、二〇一七、二八三－二九五頁を参照。もともとヴァイキングの商業的側面に関して研究を進めていた熊野は、アイスランドの国家形成に関心をもち、サガをはじめとするアイスランド語史料に研究の対象を変えていった。

（31）菅原邦城「日本アイスランド学会：研究者の結集と活動」小澤・中丸・高橋編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための六五章』、三八六－三八九頁。

（32）「フラヴンケルのサガ」『形成』三六、一九七二、七三－九五頁。

(33) 谷口のスカルド詩理解については、「古代北欧詩人の肖像」『広島大学文学部紀要』二七－二、一九六七、一九五－二一六頁：「バイキングの一般教養」『広島大学文学部紀要』四二、一九八二、一九四－二一四頁：「スカルド詩人とケニング」一九八三。これら一連の論考においては、技巧を凝らしたケニングを重ねるスカルド詩を愉しむヴァイキングの高度な「教養」を提示している。

(34) 同時に受賞したのはパムレーニ・エルヴィン編（田代文雄・鹿島正裕訳）『ハンガリー史』の恒文社、阿川弘之著『山本十六伝』を英訳した講談社インターナショナル、トマス・ハーディ（長谷安生訳）『諸王の賦――ナポレオンとの戦いの叙事詩劇』の成美堂、ノースロップ・フライ（海老根宏・中村健二・出淵博・山内久明訳）『批評の解剖』の法政大学出版局である。

(35) 『歴程』二六四、一九八〇、三三頁。同時に受賞したのは詩集『会社の人事』（晶文社）を刊行した詩人の中桐雅夫。

(36) 『歴程』二六四、一九八〇、裏表紙。

(37) 山室静と対談「北欧神話への誘い」『ユリイカ特集北欧神話』一二－三、一九八〇、八二－九八頁。

(38) この理由は、小澤がアイスランド大統領府に谷口の受賞理由を尋ねたメールに対して、大統領府特別助言役ウナ・シグヴァトドッティルから送られてきた公式メール（Reference: EFI2012110023）に記された回答である。

(39) 『日本アイスランド学会会報』一〇、一九九一に掲載。

(40) https://www.mbl.is/greinasafn/grein/54872/?item_num=4&dags=1990-08-22

(41) 「回想のアイスランド」『図書』五一〇、一九九一、六－一一頁。

(42) 「広島の回想」六頁。

(43) 本書の刊行に先立って執筆した「絵で見る中世北欧の庶民生活」『図書』四九〇、一九九〇、一四－一九頁でものべられているように、谷口の心を特に捉えたのは図版である。

(44) 長年流通していた英訳もまた九章までの部分訳である。Saxo Grammaticus, *The History of the Danes: Books I-IX*, edited by Hilda Ellis Davidson, and translated by Peter Fisher, Woodbridge: Brewer, 1980.

(45) 成川岳大「スノッリと『ヘイムスクリングラ』」『アイスランド・グリーンランド・北極』、三二六－三三六頁。

(46) 平成一六年一〇月三〇日に兵庫県三田郵便局の消印を確認できる。

(47) 書肆探しは小澤も関わったので記憶を記しておきたい。もともと谷口は、『エッダ』と『アイスランドサガ』の担当者を頼って新潮社に話を持って行ったが色良い返事をもらうことはできなかった。その後、谷口から電話で相談を受けた小澤は、手紙で以下のように答えている。「『ヘイムスクリングラ』刊行の件ですが、私のほうでも少し可能性が見えてきました。東京大学の池上俊一先生に、手許に谷口先生の訳稿がすでにあることを話しましたところ、大変な関心を寄せております。私が企画書を書けば、講談社学術文庫かちくま学芸文庫の編集部には紹介してくださるそうです。また、まだ公にはなっていませんが、今後池上先生が企画編集者となって、山川出版社より「西洋中近世年代記・日記集成」という原典翻訳シリーズを立ち上げるらしく、そこに入れることも可能かもしれないとのことです。」（平成二〇年六月末日）。しかしこの時点で谷口は横山にも相談しており、小澤側の話がまとまらないこともあって、プレスポートから出版した。いただいたお返事では、自分の視力が持たない可能性があるので早く出したかった、とのことである。なお小澤の研究室には、谷口から送られた入稿前のタイプ打ちの訳文がある。

(48) なおプレスポート・北欧文化通信社という複雑な版元名については、同出版社のホームページ（http://www.nordicpress.jp/）に経緯が記されている。もともと北欧文化通信社は、『北欧』（一九七二－七八）という雑誌を刊行していた出版社であったが、その後休眠し、横山の企画に参加することで活動再開した。しかしその後、両者の間に「齟齬」が生じ、北欧文化通信社は企画から離脱したが、横山側は「プレスポート・北欧文化通信社」として刊行を続けている。

(49) 熊野聰『北欧初期社会の研究：ゲルマン的共同体と国家』未來社、一九八六：阪西紀子「中世ノルウェーの「王のサガ」とフェーデ：『ヘイムスクリングラ』をめぐるナショナリズムの問題」『一橋論叢』一一八－二、一九九七、二三五－二五一頁。

(50) 例えば、石田英一郎・岡正雄・江上波夫・八幡一郎『日本民族の起源：対談と討論』平凡社、一九五八。

(51) 山室静は「エッダ」の中に神話的世界観を求めるが、谷口は、「エッダ」や『デンマーク人の事績』に見える神話的世界観の中にも垣間見えるゲルマン習俗を掘り起こそうとしているように思われる。

(52) 谷口の方法論を示すのが、「庶民の生活と民間信仰――文化の基層における比較民俗学研究――」松本仁助・香西茂・島岡宏編『共生の国際関係：国際学の試み』世界思想社、一九九七、一四二－一六六頁。

(53) 阿部謹也がソ連の中世史家アーロン・グレーヴィチの研究などを通じて、北欧中世への関心を深めていたことは検討に値する。グレーヴィチはラテン中世とは異なる北欧中世の世界観や価値観の検討を出発点として、西洋中世世界の独自性を提示した。彼については、石井規衛「グレーヴィチ」尾形勇他編『二〇世紀の歴史家たち四』世界編下、刀水書房、二〇〇一、三五一－三七〇頁を参照。

(54) 例えば三年ごとに行われている国際サガ学会には、毎回複数の研究者が参加し、報告を行なっている。アイスランド大学のヨーン・カール・ヘルガソン教授を招いて行われた国際会議に関して、小澤実「国際ワークショップ「Old Icelandic Text in Medieval Northern Europe」を終えて：ワークショップの記録と今後」『立教大学日本学研究所年報』一二、二〇一四、九三－一〇五頁。その成果は、Minoru Ozawa (ed.), *Proceedings of the International Workshop* "Old Icelandic Texts in Medieval Northern Europe". Tokyo: Rikkyo University, 2013.

(55) 戦後におけるアイスランドと日本の交流史は、Kristín Inguvarsdottir, "Samskipti Íslands og Japans eftir síðari heimsstyrjöld Stjórnmálasamband í 60 ár", *Skírnir* 191 (2017), pp. 501-544.

（おざわ　みのる　本学文学部教授）